

## 絵本というメディアの可能性

松本 猛

### 1 絵本は子どものための本か

日本の絵本の読者

いつから絵本が子どものための本といわれるようになったか

スウェーデンの思想家エレン・ケイ『児童の世紀』(*Barnets århundrade*, 1900)

＜子どもは大人の未完成なものでも未成熟なものでもない。教育を通して子どもの権利は保障され、子どもは生来の資質と個性は開発されなければならない。＞

『世界図絵』(コメニウス) (*Orbis sensualium pictus*, 1658) がなぜ子どもの本の起源といわれるのか

### 2 絵本の起源と 20 世紀までの歴史

古代エジプト 死者の書 (BC16C)

中国・東晋 女史箴図 顧愷之 (4C)

マヤ文明 グロリアコデックス (13C マヤ文明は BC3000 から)

イスラム文化圏 ミニアチュール

日本

絵巻物 12C 平安時代に普及

信貴山縁起 源氏物語 鳥獣戯画 etc.

奈良絵本 15～16C 室町後期～江戸初期

江戸絵本(絵草子)のメディアとしての役割

喜多川歌麿『吉原青楼年中行事』(1804 風俗絵本 十返舎一九)

葛飾北斎『富岳百景』(1834)

歌川国芳 風刺 風俗

ヨーロッパの時祷書 中世

イギリス 19 世紀の豪華版絵本

### 3 現代日本絵本の機能 発達心理の側面

幼児に読み聞かせるものとしての絵本

『絵本の魅力 その編集・実践・研究』(無藤隆ほか 著 フレーベル館, 2017)

先進国での絵本の普及

日本ではこの半世紀で読み聞かせの習慣が定着した。

背景：第二次ベビーブーム 1960 年代後半

〈共同注意〉としての絵本

他者の注意の所在を理解し、その対象に対する他者の態度を共有すること  
自分の注意の所在を他者に理解させ、その対象に対する自分の態度を他者に共有して  
もらう行動。

9 か月ころから出現 指さし行動 対象の共同化 ⇒ 意味づけ 価値づけ  
読み聞かせの意味 動かない絵に関しては数十秒で飽きる。声の変化が注意を喚起

〈命名ゲーム〉としての絵本 一歳半

親が指さして名前を言う。子どもがそれを見て似た発音をする。  
親が受け入れて名前を繰り返す。次第に子供が指さして命名するようになる。  
ジェローム・S・ブルーナー  
図鑑絵本は命名ゲームの高度化

〈予測確認の喜び〉としての絵本

なぜ子どもは同じ絵本を繰り返し読みたがるのか？  
『いないいないばあ』『はらぺこあおむし』『てぶくろ』『わたしのワンピース』  
『おおきなかぶ』 長新太の絵本

★発達心理において絵本のクオリティーは意味を持たないのか

『いないいないばあ』（松谷みよ子 文 瀬川康男 絵 童心社、1967）

おもちゃ絵本 遊びの再現

一見シンプルに見える動物たちの姿に独特のマチエールを与える意味。

『はらぺこあおむし』（エリック・カール 作 森比左志 訳 偕成社、1976）（*The Very Hungry Caterpillar*, 1969）

おもちゃ絵本

美術史とのつながり 印象派のタッチ、16～17 世紀フランドル派の精密な絵のタッチ

『わたしのワンピース』（西巻茅子 作 こぐま社、1969）

パターン化 リズム 単純化の意味

繰り返し読むことの意味 視覚的発見の意味 音楽性との関連

すぐれた絵本の絵を描くアーティストの持つ魅力は、今まで十分には絵本の世界では  
語られてこなかった。

4 絵本というメディアの情報伝達能力

① 歴史絵本 歴史書としての絵本の可能性

絵本でなければ表現できない歴史。絵本で歴史を描くことに意味

視覚情報量 絵巻物 江戸絵本 資料的価値と美術的価値

(1) 『絵で見る日本の歴史』(西村繁男 作 福音館書店, 1985)

横長の画面、俯瞰

文章は見開きの下段に一行だけ、120 字以内。巻末に解説ページ。そこには本文と同じ絵の線描画があり、画面中に何が描かれているかの記述ある。

歴史的事件の羅列ではなく、庶民の生活が時代とともにどのように変化するかがテーマ。西村の〈観察絵本〉『にちよういち』(童心社, 1979)『おふろやさん』(福音館書店, 1983)『やこうれっしや』(福音館書店, 1983)の発展形態。

無数の人物を描き込んだ斜め上からの俯瞰表現は絵巻物の基本スタイル。

**古墳時代**

神戸市の五色塚古墳がモデル。膨大な労働力を必要とする工事は、労働力が確保しやすい農閑期に行われたと考えられている。西村はこの場面を描くにあたって冬の景色を選んだ。

**平安時代 貴族の館の場面**

絵巻物などの画像資料を元によりリアルなイメージを展開する。場面設定の意味。歴史資料に基づいて描かれているが、全体の構図や人物の動きは画家のオリジナル。

**平安時代 祭の行列が描かれた場面**

「年中行事絵巻」を参考にした稻荷祭。絵巻との違い。生活描写に力点を置く。リアリティーを意識し、ディテールに意味を持たせる。

**平安時代 源平合戦の場面**

「後三年合戦絵巻」「平治物語絵巻」「北野天神縁起絵巻」「蒙古襲来絵詞」などが参考資料。場面は夕日に染まった海辺の戦いの様子。貴族社会、平氏の時代の終わりを暗示。

(2) 『百年の家』(ロベルト・インノチェンティ 絵 J.パトリック・ルイス 作 長田弘 訳 講談社, 2010) (*The house*, 2009)

時代考証へこだわった定点観測歴史絵本。

1656 年に建てられた小さな石造りの家の物語。家の一人称で語られる。物語は、1900 年に廃屋だった家を子どもたちが見つけるところからはじまり、20 世紀の終わりに解体され幕を下ろす。家の姿を通して描く 100 年の歴史。

- ・地域が特定できる
- ・登場人物の生涯を描く
- ・時代の描写 経済状態 戦争など

★その他の歴史絵本。

『絵で見るある町の歴史 タイムトラベラーと旅する 12,000 年』(スティーブ・ヌーン 絵

アン・ミラード 文 松沢あさか、高岡メルヘンの会 訳 さ・え・ら書房、2000 第 48 回  
産経児童出版文化賞大賞を受賞) (*A street through time*, 1998) 『百年の家』が歴史を素材にし  
たアート作品だとすれば、同じ定点観測の手法で描かれているが、より図鑑に近い知識絵本  
の性格を持つ。(類書『絵で見るある港の歴史』(*A port through time*, 2006) や『絵で見るナ  
イル川ものがたり』(*Story of the Nile*, 2003))

『ちいさいおうち』(バージニア・リー・バートン 作 石井桃子 訳 岩波書店、1954)  
(*The Little House*, 1942) も定点観測の歴史絵本。

『旅の絵本』(安野光雅 福音館書店、1977) も歴史絵本としての性格を持つ。この絵本  
は、社会事象から芸術作品まであらゆるものを絵のなかにひそませる。

## ② 自然と地球環境をテーマにした絵本

知識絵本・科学絵本の大半は自然をテーマにしている。

地球そのものを扱ったものを見ただけでも、地質学や地理学や気象学になど多岐の分野  
にわたる。

動物というテーマだけでも原生動物から昆虫、魚類、爬虫類、哺乳類までその種類は膨大  
である。もちろん植物についても数えきれないほどある。

科学絵本と意識されていない絵本のなかにも、実は自然や環境がかくされたテーマとし  
て描かれている絵本は相当な数に上る。

### (1) 『14 ひきのあさごはん』(いわむらかずお 作 童心社、1983) 他 3 冊

ミリオンセラーの『14 ひきのあさごはん』をはじめ『14 ひきシリーズ』全 12 巻は野ネ  
ズミの大家族が大自然の中で生活する姿を描く。

現代の子どもたちが受け入れるこの家族の生活スタイルは、昭和初期から中期にかけて  
のもの。現代の便利な生活とはかけ離れているが、子どもたちは本能的に、そこに人間の  
原初的な生きる喜びがかくされていることを感じとる。

### (2) 『ピンク、ぺっこん』(村上康成 作 徳間書店、2000)

村上康成の絵といわむらかずおの絵との違い。いわむらの絵が、実際の姿に忠実に、図  
鑑としても役立つくらいに正確に描かれているのに対し、村上の絵は、大幅に単純化、デ  
フォルメされている。単純化、デフォルメは不正確な描写か。

動物の特徴を強調することの意味

生態系の描写

正確な季節の描写

地域の特定

### (3) 『ピンク！パール！』(村上康成 作 徳間書店、2000)

魚の特徴を使って、生態系の破壊に警鐘を鳴らす、メッセージ性の強い絵本。

### 村上康成の言葉

「長良川に河口堰というダムが造られることになって。僕は長良川の上流の郡上八幡で生まれて育ったものですから、豊かな自然とのつながりを感じていたんですけど、そこにダムができてしまうということで、当時大反対をしていました。その大反対のことをこういう絵本にしてしまっていていいのかというのもあったし、やっぱり読んで希望が湧くものにしたというただそれだけであつたので、どうにかこの 3 冊目を出版したいなど、ピンクとパールにダムを跳び越えさせた。」(対談「絵本表現の模索～受賞作品『ピンク！パール！』を通じて」にて、千葉県美術館「2016 絵本フォーラム BIB50 周年ブラティスラヴァ世界絵本原画展と日本の絵本 50 年」, 2017.2.4.)

## 5 絵本のテーマの拡大と社会的役割の拡大

現代の絵本は、歴史と自然に限らず、絵本が視覚情報を活用することによって、文字情報中心のメディアとは違ったメディアとして表現の幅を広げている。その分野は、戦争と平和、核と原発、多文化共生、貧困・差別、生と死・老い、人権・ジェンダー等々従来の絵本が扱わなかった分野に踏み込んでいる。

『ぼくは くまのままで いたかったのに』『うさぎの島』『ふたつの島』（イエルク・シュタイナー 作 イエルク・ミュラー 絵 大島かおり 訳 ほるぷ出版, 1978, 1984, 1983)

『エゾオオカミ物語』（あべ弘士 作 講談社, 2008 図 表紙）

『しまふくろうのみずうみ』（手島圭三郎 作 リブリオ出版, 2001 図 表紙）

昔話、民話、童話、児童文学、教育という概念の中で語られることが多かった絵本は、新しい価値観でとらえる必要が生まれてきている。

社会的役割についても、教育分野での役割はもとより、病院、介護施設での役割も大きくなっている。

21 世紀の絵本は、20 世紀に確立された「子どものための絵本」の範疇から踏み出しつつある。

50 年前には美術として認識されなかった絵本だが、絵本専門の美術館が 30 館以上になり、公立美術館での絵本原画展は当たり前になった。

芸術ジャンルとしての絵本の認識も拡大されつつある。